

---

# 魔剣士ねこみや

章字志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔剣士ねこみや

### 【Nコード】

N7569E

### 【作者名】

章字志

### 【あらすじ】

「魔法使いの修行してきてね」「問答無用！主人公は剣と魔法の摩訶不思議ファンタジックな異世界へ」。「基本はRPGつしょ」既にそんなノリ。

## 第0章 プロローグ

世界はいつも通り、平凡で面白みに欠けた時間を送っていた。  
とある高校生、猫宮封兎ねこみやふうともまた同じであつた。

否、同じであるハズだつた。

何故こんなことになつてしまったのだろうか、体が落下していきような嫌な感覚の中、猫宮少年は途方に暮れていた。

理由は、先程告げられた母親の言葉にあつた。

『ふーちゃん、実はね、お母さんとお父さんって魔法使いなの』

電波的なことを言われたその時、嬉々としている母親の頭がついに逝ってしまったのかと少年は心配した。

ちなみにふーちゃんとは、もちろん猫宮少年のことである。

『それでね、ふーちゃんももう16歳だし、そろそろ話してもいいかなと思つたんだけど…』

この時、猫宮少年は激しく嫌な予感がした。

『継いで貰いたいよね、魔法使い』

少年の予感はまさしく的中。

まさかーと思いながらも、冷や汗が頬を伝う。

ちなみに猫宮少年が16年間生きてきた中で、母親がこんな電波的冗談をしたことが無い。

というよりもそんなことをするセンスがない。  
それが分かっていた少年は、この話が冗談では無いことを理解していた。

『だから修行してきてね』

そう言い終わった直後、指を鳴らす。

その瞬間、猫宮少年を囲うように無数の魔方陣が現れる。

少年は半ばパニック状態。

母親は終始ニコニコ笑顔。

そして一言、頑張ってね、と。

少年にとって、それはあまりにも無常であった。

永遠に続く当たり前に思っていたいつもの生活。

それが粉々散り散りに砕かれた。

こうして、猫宮封兎少年の空前絶後の物語は始まりを迎える。

## 第1章 異世界へ : 第1話

少しばかり薄暗い場所で、猫宮少年の意識は覚醒した。辺りを見回し、此処がどこなのかを確認する。

天井近くの窓のステンドグラス、いくつもの蝋燭や燭台。

そういった装飾などから、教会のような所であることが分かった。

そして祭壇らしき場所にある、人の背丈の二倍以上はある巨大な十字架。

教会等の十字架には普通、江戸時代の踏み絵のようにキリストが居るものだが、この十字架は違った。

代わりに、その十字架と同じぐらい巨大な大剣が鎖によって雁字がんじ搦がらめにされていた。

「…なんだコレ？」

その大剣を見上げる。

真っ白な十字架に反し、大剣は宵闇で染まっていた。

黒光りする刀身は威圧的な雰囲気放っている。

「にしてもでか過ぎるだろ…」

猫宮少年がそう思うのも無理はない。

人間の背丈の2倍以上ともなれば、その巨大さ故の重量はとても人間の手に余る。

扱うのが難しいというレベルでは最早無い。

そこまでいってしまえば既にゲームや漫画の世界である。

常識的に到底不可能であると思うのが当たり前だ。

なのに存在するその大剣。

意味があるのか、と少年は疑問に思ったが、とりあえずはただのインテリアと納得しておくことにした。

しばらく見てると、近くに大剣の柄へと続く階段があるのに気付いた。

大剣をさらに近くで見てみたいという好奇心で、その階段を上ってゆく。

巨大な刀身の割に、柄は大して他の剣とは変わらないようである。とはいっても、猫宮少年にとってまだ他と比べられることはできないが。

長く幅広、力強い感じが伝わる漆黒の刀身は、まるで鏡のように猫宮少年の顔を映していた。

好奇心に煽られ、柄へと手を伸ばす。  
そして柄を握り締めたその時。

大剣を束縛していた鎖が碎け散った。

「ええッ!？」

猫宮少年が驚愕の声を上げる。

手にはあの大剣。

地面には鎖の破片。

何をどうしても言い逃れられない状況その1。

(ヤバイ、激しくヤバイ。どうする!？俺どうしたらいい!？)

少年は焦る、焦る。

軽いパニック状態の頭を駆使して答えを導く。

（やっぱりあれか、見つかる前に逃げた方がよさげ？）

そうと決まったら少年の行動は早い。

階段を飛び降り、大剣を手に逃げの体勢。

今まさに逃げる　その時。

「何者ッ！？」

早速見つかってしまった。

実は鎖が碎けた時、意外と大きな音がしていたのだ。

ついでに、少年の悲鳴もあった。

そのおかげで異変に気付いた兵士が駆けつけてきたようだったの  
である。

仕方無しに大剣を構える。

そこで少年は気付いた。

「なんでコレ持ててんの？」

## ：第2話

対峙する1人の少年と1人の兵士。

自分の身長の2倍以上はある大剣を構えているが、まったく隙だらけの少年。

反対に、軽装ではあるがプロの雰囲気を漂わせる兵士。

どちらが勝てるか、そんなのは見ればすぐに分かる。

それには少年も気付いていた。

だからこそ頭脳を使う。

学校での成績はなかなか優秀だった少年にとって、それは難儀することでもない。

（ここは作戦B - 28 決行か…）

学校で培った対不良作戦を思い返す。

剣を再度構えなおし、兵士を睨みつける。

緊張の一瞬、そして。

「ああー！！アレなんだ！！??」

いきなり叫び、兵士の背後を指差す。

見事につられて後ろを振り向く単純兵士。

少年はその時を見逃さなかった。

兵士へと一気に接近し、大剣を振りかぶり。

「どりゃアッ」



大剣の刃の平面部で、思いつきり兵士の顔面を打ちつけた。  
フライパンの底で叩く要領である。

兵士はそのまま吹っ飛び、出口あたりで大の字で失神していた。  
些か不憫であるが致し方ない。

「さーで、とつとと逃げるかー」

とにかく建物の外へ出ようと教会らしき所を後にする。  
出口から出たすぐそこは、右と左とで通路が別れていた。

「よし、じゃあ右」

とは言いつつも足は左へ向かう。  
そちらへ一歩踏み出したその瞬間。

「あ。」

目の前に本日2人目の兵士が出現。  
兵士は当然の如く任務を全うする。

「侵入者だぁー！ー！ー！！」

兵士の叫びが建物全体へ響く。  
少年は逃げを選択した。

命からがらというかなんというか。  
少年はなんとか逃げ切った。

あの後、ものの数分も立たないうちに、少年を追いかける兵士達

の数は30人を越えた。

対不良作戦（内容は極秘）を駆使したものの、少年は当たり前だが疲弊していた。

逃げ切ったというのは運が良すぎたに過ぎない。

そして今は大剣を杖代わりに、どこかへ向かってふらふらと歩いている。

大剣の大きさがどうか重さがどうか最早関係ない。

どれくらい歩いたのだろうか。

ちなみに教会があった所は、実際は城の一部であった。

その城というのが此処周辺の国々をいくつか統括している王の所有物の1つである。

ということは、少年はとてつもなく危険なことを犯した事になる。勿論そんな事は少年は知り得ない。

何十分も疲弊した体で歩き続けた少年にとって、過ぎたことはもうどうでもいい事だった。

そのあたり周辺は何もなく、見渡す限りの草原が広がっている。

既に少年は限界に達していて意識朦朧。

膝を地面に着いて倒れこむ。

「腹へった……」

そこで少年は力尽きた。

### ：第3話

少年の目が覚めたとき、一番最初に見えたのは木の天井だった。  
何故こんな所にいるのだろうか。

その疑問を解消する為にゆっくりと思い返してみる。

（えーと…いきなり教会に現れて謎の大剣を強奪、その後逃走し、  
やがて力尽き行き倒れ…そこへ親切な人が通りかかり、半屍状態の  
俺を拾ってくれた、ってところか…）

世の中捨てたもんじゃないね、と少年は元の世界を思いながら感  
慨に浸る。

きつと行き倒れていても無視されるんだろうな……

そんなことを考えていたとき、人が部屋のドアを開けてやって来  
た。

「やっと起きた？」

現れたのはなかなか美しい女性。

全体的にすらっとした体型ではあるが、出る所は出ていてなんと  
もグラマーである。

その凹凸は服の上からでも分かる。

顔はきりつとしていて、良い意味で男らしい。

170を越えていそうな身長とポニーテールが姉御的な雰囲気  
を醸し出していた。

頼れる姉御。

それが少年の第一印象であった。

実際それは近かったが。

「ああ……ここは？」

部屋の中を見渡す。

壁際にはクローゼットや机などの日用品が必要最低限並べられている。

何の変哲も無い普通の部屋だった。

が、テレビなどの電気製品が何も無い。

天井にも電球らしきものは見当たらない。

というかそれ以前にコンセントさえ無かった。

やっぱり異世界なんだろうな…と少年はしみじみと思う。

「ここは私の店の部屋だ。具合はどうだ？」

「……そうだな、腹が減った」

「はいよ。なにか作ってやるよ。即席だけど勘弁な」

そう言い、部屋を出て行く。

揺れるポニーテールが何とも言えない。

「ご馳走様でした」

「どういたしまして」

食後の一息。

お茶らしきものを手にちよつとした団欒。

「そういえばまだ名前を聞いていなかったよな。私はシリル・グラデフォンだ。お前は？」

シリルが一旦部屋を出て食器を片付けて来た後、そう封兎に話しかけた。

「猫宮封兎。よろしく」

「ああ、よろしく。…しかし少し変わった苗字だな…」

シリルは微妙というか、なにか思案してる顔をしていた。

「…まあ、確かにあまり無い苗字だけどさ」

「いや…そうじゃなくて。その苗字は誰でも知ってるんだよ。誰でも。」

「？なんで？」

「この世界で最強の剣士の名前だ。知らない奴は居ないね。そこら辺のガキでも知ってる」

そしてその名前を口にする。

その声には尊敬の念が込められていた。

「猫宮驟雨<sup>しゅうう</sup>」

その名前を聞いて封兔は驚く。

自分の父親の名前と完全一致していたからだ。

まさか本当に自分の親がその超有名人なのか？

いやそんな偶然は無い

「そんでその子供の名前が封兔。確か今年で16歳…」

あった。

「いやあー…こんなのがアイツの息子なんてなー」

「こんなのってなんだよ!？」

ちなみに封兔の外見は……格好いいと言えば格好いいが、そうではないといえば普通である。

恋愛関係において、毎回の如く友達以上恋人未満でストップするのはそれも関係あった。

一番大きなのは性格にあったが。

勿論本人はその事を気にしていない、というかそれ以前に気付いていない。

封兔は楽天家だった。

「とまあそれで、だ。なんで封兔はあんな所で行き倒れていたんだ？」

「それは……」

かくかくしかじか。

適当に大まかな流れを掻い摘んで説明する。

「……なるほど。修行ねえ……お前の両親らしいな」

「……？……両親？」

「あ。お前の母方も似たようなものだったな。最強の魔術師、ミサ・クリスティエル。親父に同じく超有名。」

「……はあ」

もつため息しか出ない。

今まで過ごしていた平凡過ぎる世界が、異常との紙一重だったこ

とに。

ちなみに、封兎の母親の名前は巳叉<sup>ミサ</sup>。  
生粋の西洋人なので、その名前は当て字だ。

(でもまあいいか。楽しそうだし)

ふとそこで気が付く。

あの大剣が無いことに。

「あの剣どこ?」

「剣? ああ、あの盗んだ剣かー……んーとな、それなんだけどさ……」

そこで神妙な顔をするシリル。

「無かったけど? お前を拾ったとき。どこにも」

「……………」

「……………」

流れる沈黙。

封兎は口をパクパクと。  
対するシリルは苦笑い。



「え、ええ！？俺は確かに持ったままだったぜー？」

「いや、無かった物は無い。それにお前の言うほどデカイのならすぐ見つけるだろうし」

「でもそんな馬鹿な……こつやって剣持って兵士と戦ったんだぜ？……少しだけど」

そう言い、剣を持つ真似をして訴える。  
と、その瞬間、部屋に破壊音が響いた。

ずどーん、と。

：第4話

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

沈黙に包まれる封兎とシリル。

封兎の額には大量の脂汗が浮かんでいて、対するシリルは引きつった笑みを浮かべていた。

勿論、その顔の目は笑っていない。  
全身にビンビンと感じる何か。

…こ、ここ殺される！？

自分が見るも無残な姿に成り果てているそんな未来を、野性的感覚で封兎は予知した。

（なんでこんなことになるんだああー！！）

封兎が剣を構える真似をしたあの瞬間、手にあの大剣が現れた。  
馬鹿でかさ故に、その剣を取り回す事は難しい。

特に狭い通路や部屋等では、その自慢の刀身を振るうことさえできない。

そんな3メートルは越える規格外のモンスターソードは当然の如く

天井を突き破っていた。

まるで「どうだ、すごいだろう」と誇らしげに見えるのは気のせいなのだろうか。

どうかそうであって欲しいと切実に願う封兔であった。

「……………あの、剣ありましたね。はは」

恐る恐るといった様子で口を開く。

乾いた笑い声しか出ない自分がなんとも情けない。  
というか笑っている場合ではない。

「……………まあ屋根はいいさ。すぐに直せるしな。それよりも……………」

封兔の心配は杞憂に終わる。

シリルはそれなりに寛大な人物であった。

今はもう封兔が感じていた何かも無くなり、表情も元に戻っていた。  
た。

「今どうやって出した？」

「どうやってって……………？んー…強いて言うなら想像？よく分からないけど」

「…なるほど……………ヴォリューション意志の力、といった所だな」

少しの間があった後、シリルが言う。  
当然のように、封鬼の顔に疑問の色が浮かぶ。

「意志の力？」

「そ。意志の力は、魔力に命令するモノ、といえば簡単だな」

シリル曰く、魔力というのは力そのものであって、意志の力によって初めてそれを使うことができる、ということらしい。  
どちらか片方しかなくても意味は無い。

魔力と意志の力、その両方あってこそ力を発揮できる。

「じゃあ、今のも魔力と意志の力を使った、ってこと？」

「…いいや、おそらく違うな」

「だったらさっき言った事と矛盾しない？」

「何もそれだけが絶対的なルールとは言っていないだろ？何事にもどこかに抜け道がある。代表的なのが魔具だ」

お前の剣もおそらくそれ、とシリルは言う。

へー、と気の無い返事をする封鬼。

自分の剣をしげしげと見つめるが、何の変わりの無いように見え

る。

この黒くて馬鹿でかいだけの剣がそんな代物だというのはあまり信じられない。

しかしその馬鹿でかさにある筈の重量がまったく無い、というのが引かかる。

何しろまるで棒切れを振り回す感覚なのだから。

封兎はやはり信じる事にした。

「魔具には魔力や意思の力が宿っていたりする、という説があるが定かではない。結構珍しいからな、魔具は」

「じゃあこの剣にもなんかあったりするのか？」

「さあな、私にはわからん。まあ使っていく内にわかるだろ」

「…それもそうだな。やることが山積みだ」

封兎がそう言った瞬間、シリルが何か思いついたような顔をした。まるで頭上に電球マークが浮かんばかりだ。

「だったら早いところ行っておかないとな」

「…どこに？」

「学校に決まってるだろ？魔法全般その他諸々を学ぶ為の」

そう言い、にやりと笑うシリル。  
その姿はやはり頼もしく見えた。

「修行するんだろ？」

## 第2章 始まる学園生活！？ : 第1話

「いくらなんでもでか過ぎるだろ…コレ」

封兎が呟くその目の前……というよりも頭上と表現した方がいいのだろうか。

そこには巨大な門があった。

でんっ、という効果音を立てているようなこの門は最早馬鹿でか過ぎて、首を精一杯上げなければ上の方が見えない。

強いて言うならば凱旋門だが、それでもまだまだ言葉が足りないぐらいであった。

「何ばさっとしてんの？置いてくよ」

そんなことをいい、マジで置いていこうとするシリル。

遅れないようにシリルの後ろを着いていく。

門を通過している間、なんとなく蟻の気持ちが分かったような気がする。

…いや分かりたくもないけどさ。

そんな取り留めない事を思っている間に門を抜ける。

が、そこで俺は驚愕…いや、呆れる事になる。

門を抜けたそこには、これまた表門に相応しい馬鹿でかい城があった。

城というより、要塞。

天空の城もびっくり仰天のレベルだ。

もう馬鹿かと、阿保かと、限度を知らんのかと。

知らず知らずの内に、自分の口からため息が漏れた。

嗚呼、幸せがまた1つ逃げてしまった…

そしてシリルに着いて行く事数分。

なんかよく分からない場所へと連れて来られた。

どうやら病院での受付のようなそこ。

奥の方は真っ暗でよく分からない。

そこでシリルは受付の窓をこんこんと叩いた。

待つこと数秒。

ぬっ、といきなり黒尽くめの人らしき物体が現れる。

よく見ると、とんがり帽子にローブを纏っていた。

闇に紛れる様な漆黒色だったので、目を凝らさないと分からないだろう。

そして、目があるところに赤い光が灯っている。

まるで幽霊の様に全体的に不気味だ。

「これはこれはシリル様、何の御用でございましょうか？」

どうやらシリルとは知り合いらしい。

シリルが経営しているらしい店が関係あるのだろうか？

「編入試験を受ける」

「…そちらの方で宜しいですね？でしたら少々お待ちください」

そついい、闇と一体化するように消えていく真っ黒黒助（命名俺）足音もしないし、歩いている様でもない。



まるでスーッと地面を滑るかの様だった。  
本当に幽霊なのではないのか？

そんな疑問を抱いている内に、既に真つ黒黒助が音も無く元の場所  
所にいた。

「すぐに試験を始めますが準備はよろしいですか？」

どうなんだ、と俺に問いかけるシリルの瞳。  
俺はその挑戦的な瞳に自信満々に答える。

「勿論だ」

試験会場へと向かう途中、俺は口を開いた。

「で、試験は具体的にどんな内容なんだ？」

「…呆れたな。内容も知らずにあの自信？」

そうして右手で顔を覆うシリル。

本当に大丈夫なのかと心配しているのだが、封兔は露知らず。封兔は本当に自信があった。

試験への自信では無く、自分への自信が。

「ああ、そんなのはどうにでもなる」

「……まあいい。内容は簡単。この学園の生徒との一騎打ちだ」

「はん、勝てばいい訳か？」

「いや、勝敗は絶対というほど関係ないよ。実力や素質があるのが分かればそれでいい」

「……ふーん。まあ、好きなようにやればいいだろ」

「お前がそうしたいならそうしろ。合否は保障しないよ」

「別にいい。勝てばいいんだ」

そうして封兔は不敵に笑う。

そんな封兔にシリルはまたも呆れていた。

## 第2章 始まる学園生活！？      ：第1話      （後書き）

やっとこさ学園編。

何か感想や要望、アドバイス等があったらどしどしお願いします。

手加減はいりませぬ……

次回ヒロイン登場予定

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7569e/>

---

魔剣士ねこみや

2010年10月9日07時09分発行